
『ダーク・ロード ―― 黄昏に抗う者』

S・HUNTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ダーク・ロード』—— 黄昏に抗う者』

【Nコード】

N2947Z

【作者名】

S・HUNTER

【あらすじ】

桐生貴夜は生まれ持ったの外観と学年トップの成績、そして反抗的な態度によって一部の不良生徒から虐待を受けていた。彼は暴力的な行動を嫌い、親友である神代顕人にも、自分の為に暴力で持つて復讐するのを止めているほどであった。

無残な死体を残し、街を恐怖に陥れている連続殺人事件が続いていたある夜、貴夜はその犯人と思しき黒衣の大男とであった。その男は『オーガ』と呼ばれている『闇の種族』^{ダーク・レイス}で、男は潜在的に強力なパワーを持つ貴夜の魂に惹かれ、貴夜を手に入れようとする。

黒衣の男——闇に堕ちる以前は、かつては『闇の種族』と敵対していた『聖戦士』だった——が貴夜に襲い掛かる寸前、それを阻止した少女の名はリーゼロッテ。『闇の種族』の中でも『主』^{ロート}と言う上級のカテゴリーに属する、青と紫の瞳を持つ小柄な美しい少女だった。しかも古代の魔術を駆使する『護法魔導師』と言う魔術師でもあるのだ。

『オーガ』を撃退した後、リーゼロッテは貴夜自身が『主』^{ロート}としての種であることを告げ、『オーガ』の手から守ることを約束した。貴夜を『主』^{ロート}として覚醒させる儀式を執り行っていた時、『教会』の『聖戦士』がリーゼロッテを襲撃した。本来は『オーガ』を始末する為に派遣された『異端処理官』ヴィートーリオは、偶然に発見した『七主』であるリーゼロッテに功名心を刺激されたのだ。

プロローグ

どこの国でもそうなのだろうが、この国の国際空港のロビーも酷く混雑していた。

雑多な肌と髪の色様々な人種が、極東のこの国のどこよりも多くそこには集まっているが、その少女はその中でも一際目立つ存在だった。

特に大きな体格ではない。いや、どちらかと言えば小柄で華奢な体つきの愛らしい少女だ。淡い浅葱色のワンピースがさらに愛らしさを醸し出している。

年の頃は十五、六であろうか？ 人形のように整ったその顔はどこかつまらなそうな表情で、ロビーのソファに座ったまま行き交う人々を眺めていた。自分が人の目を集めていることに気づいてもいない。

細い金糸を集めたような、白い輝きを放つ腰までの長いプラチナ・ブロンドは、淡い水色のリボンが飾られ、北欧人のようなミルク色とは趣の違う、蒼白いほどの白い肌に相まって、どこか作り物じみた外見を強調している。

——しかも天上の名匠による奇跡の造型だ。人間の手にはこれほどの美しさを顕わすことなど、きっとできはしないだろう。

少女が人工的な印象を与えるのは、きっとその瞳の色にも理由があるであろう。

左右の色がはっきりと違うそれは、オッド・アイとか金銀妖瞳とか呼ばれているものだ。地方によってはいまだに魔女の印、邪悪の象徴ともされている。

右目は夜明けの空のような青。左目は黄昏に近い空の赤味を帯びた紫色。

どこか幻想的な美しさを見る者に印象づけるその瞳こそが、少女の存在そのものを顕わしているようだった。幽玄の、どこか生身の

人間とは思えないようなその印象のすべてを……。

少女の傍らには、さらに幼い少女が座っていた。

十歳に満たないであろうこれもまた愛らしい少女だった。藍色に近い黒髪を背中まで伸ばし、大きな赤いリボンを飾っている。その大きな瞳は青空を氷で閉じ込めたような鮮やかな水色をしているが、どこか表情に乏しい落ち着いた雰囲気醸し出している。

二人の美少女は、自分たちに向けられている視線をまるで感じる様子もなく、どこか超然としてソファに座っていた。周りの一切を存在しないものと振舞っているかのようにも感じられる。

「本当にゴミゴミした所ね。それに空気も良くないわ」

金髪の少女はつまらなそうな声で呟いた。桜色の唇がすこし突き出ている。

先ほどのまでの作り物じみた印象が、そこでがらりと変わってしまったような表情と口調だった。つんとしたその顔は急に生氣を感じさせる。

「時代が変わってしまったのですから仕方がないでしょう」

黒髪の少女はその外見からは想像も出来ないような大人びた、そして無感情な口調で金髪の少女に答えた。

「それにあなたの意思でこの島にやって来たのですよ、ミレディ」
旧い言葉で黒髪の少女は金髪の少女を『ご主人様』^{マイン・レディ}と呼んだ。この二人は主従関係にあるのだ。

「——そうね。でも正直言えば、なぜこの国にあの方がやって来たのかわたしには理解できないわ。それに……」

「あの方がなんの為にこの国へやって来たのかなど、ミレディには関係ないと思いますが。どちらにしろ、ミレディはあの方を——」

「わかっているわよ。でもね、やはりわたしはあの方を見つけることができないかも知れない。見つけてもわたしには……」

少女の声は、最後の方は呟きになって消えた。その色の違う瞳に、わずかに暗い影がよぎった。

「それもミレディの意思で決定するのなら問題はありません」

黒髪の少女の声は無機質だった。だが金髪の年上の少女は、わずかな笑みを浮かべてビロードのような黒髪を撫でた。

「いつまでもこんな所に居てもしょうがないわね。一休みして体調も元に戻ったことだし、そろそろ行きましょう」

金髪の少女はしなやかに立ち上がり、小さな鞆一つを手に提げて、出口に向かって歩き出した。その後ろを黒髪の少女が追う。どこか辺りを探るように、その小さな頭を左右に振りながら……。

始まりの夜

1

下弦の月が美しい夜だった。だが霧生貴夜きりゆうたかやはそんな幻想的な美しさを持つ夜空にも、その目を向ける気分にはなかった。それどころか苛立ちと怒り、そして謂われのない劣等感に苛まれ、俯くように地面を見ながら彷徨うだけだった。

それに、どうせ月よりも派手で毒々しいネオンサインの光が、あちこちに光り輝いているこの道では、情緒豊かにそれを眺めることなどできやしないのだ。

貴夜は中肉中背の目立たぬ少年だった。だがどこか鋭利な印象の面立ちと切れ長の目、そしてすつきりと通った鼻筋とやや薄いが形の良い唇の、よく見れば非常に整った容貌の持ち主である。

だが陰鬱な表情で俯き、背中を丸めたとぼとぼと歩く今の貴夜の姿は、あまりにも陰気臭く近寄り辛い雰囲気漂わせていた。それに全身が土埃に汚れ、無数のほころびと鉤裂きに飾られた制服姿は、誰もが係わり合いになるのを恐れる風体であった。

貴夜は不良集団による苛めを受けていた。いや、それは苛めと言うより暴力であり虐待と言えるものだった。顔や露出している素肌には傷跡や痣など見えないが、制服の下には無数の青痣が残っている。

ただ貴夜はそれに対し諾々と受け入れているわけではない。どちらかと言えば反抗的な態度を示す少年だった。だからこそ、その暴力がさらに酷くなってきたのは、貴夜にも重々承知の事であった。

貴夜はプライドが高すぎる少年だった。いや、それだけではない。

常にトップレベルの成績を持ちながらも、彼には少々賢さが足りないのかも知れない。要領よく立ち回る術を知らないのだ。

もちろん、貴夜には虐待を避ける為の方策はいくらでも考えついただろう。彼らが望むような従順な態度を取り、卑屈な学校生活を送るのは問題外にしても、教師に虐待の事実を告げてもらえばいい、いざとなれば暴力事件として警察に駆け込めばいい。

だが貴夜はそんな考えに及ぶような少年ではなかった。それはなにかに負けてしまうような気がしているからだ。

結局はプライドだけが高すぎて、他人に頼ることもできないと言う性格だと言っただけなのだろう。

ただそんな貴夜には、虐待の首謀者達を死ぬほど憎悪し、復讐したいとか、殺してやりたいとか、そう言った暗い感情はなかった。それにあてつけのように自ら死を選ぶような考えもない。ただ暴力やそれに類するものが嫌いなだけなのだ。

別に強い信念があるわけでもない。ただ貴夜がそのような性質だと言っただけだ。

とは言え、このまま黙っていてもなんの解決にもならないのは承知の事実だった。

無抵抗でいれば、いつかは相手も厭きるだろうと言う、そんな考えはすでに意味のない、貴夜の独りよがりな甘い考えであると思ひ知らされたのだ。

それは今日の午後の出来事であった。

いつもの如く下らない理由で因縁をつけられた貴夜は、いままでにはない暴力に曝されてしまったのだ。

彼らと同様の暴力で反抗することもなく、許しを請うこともしない貴夜は、つい三十分ほど前までサンドバックのように扱われていたのだ。

どう考えても一人でいる時を狙われたのだろう。

普段は親友の神代^{かみしろ あきと}と共に下校する貴夜であったが、今日は偶々頭人が早退していた。そして彼らはそれを知って計画的に貴夜を

待ち伏せていたのだ。

彼ら——貴夜を目の仇にする虐待グループは、以前顕人に手痛い報復を受けていた。

格闘技経験があるらしい顕人は、並みの不良よりも遥かに強かった。自分は掠り傷一つ負わず、五、六人ほどのグループ全員を簡単にのしてしまっただのだ。

親友の貴夜を守る為に行なった行為だったが、貴夜自身はそれを批判してしまった。

——暴力で暴力に対抗しては、所詮彼らと変わらないのではないかと。

もちろん、顕人の行為が嬉しくなかったわけではない。その理由も痛いほどわかっている。なんと言っても、顕人は貴夜に取って唯一と呼べる親友なのだから……。

だが自分の信念として、貴夜はもう二度とそう言うことはしないで欲しいと顕人に告げたのだ。実際はそれほど強い信念などないのだが……。

顕人は酷く不服そうだった。そして呆れたようにこう言った。

（この世界にはおまえが思うほど、まともな人間ばかりじゃないんだぜ。おまえが引いても、それ以上に踏み込んで来る奴は大勢いるんだ。やられてもやり返さない人間を、さらに追い込んでくる卑劣で下劣な奴がな）

顕人の言葉はある意味真実を突いていただろう。だが、貴夜はそれでも信じるつもりであった。人間の本性は善であると。

不承不承であったが、顕人は貴夜の言葉に従った。

しかし全身に燃えるような痛み覚えるいまとなつては、貴夜の考えがいかに甘いものだったか考えさせられる。

自分のことも守れない人間は、信念を声高に叫ぶこともできない。しよせん負け犬の遠吠えと変わらない、そう言った現実を……。

もつとも、本当に自分を情けなく思っているのは、ポケットに忍ばせている冷たい金属の感触の所為であった。

それは父が残した形見であった。

古いデザインの、まるで中世の騎士が持つような幅広の剣を模した短剣だった。だが実用には覚えもないほどの小さな、ミニチュアの模型のような……。

武器として持っているのではない。

ただの御守りだ。

——だが小さいとは言えその鋭い刃は、充分に人を傷つけることのできる凶器にも変わるのだ……。

貴夜の家までは後五分も歩けば辿り着くはずだ。もし身体を痛めつけられていなければ、駅の駐輪所に止めてあった自転車に跨り、今頃はすでに辿り着いていてもおかしくはなかったのだが……。

足を引き摺るように、重い身体を苦勞して動かしているの、普通に歩くよりもさらに時間が掛かってもいる。

ここまで来ると、繁華街から大きく外れているので、人通りもほとんどなくなっていた。その代わり、酷く寂しい暗い道が続くことにもなる。

普段は別段、そのようなことに不安を覚える貴夜ではなかったが、ここ最近の物騒な事件の所為もあり、すこしばかり神経質になっていた。どうもこの街には連続殺人鬼が通り魔の如く徘徊しているらしいのだ。

奇妙で恐るべき事件が起きたのは二ヶ月ほど前のことである。この街を含めた地域で、全身から血を抜かれ、手足をもぎ取られ、

内臓がポツカリとなくなってしまった遺体が複数発見された。まるで猛獣に襲われたような無残な遺体の為か、それが人間の仕業だとは思えないと言われていた。とは言え、それほどの惨状を造り出すような猛獣の痕跡は、一切発見されていない。

あたり前だろうと貴夜は思う。

なんと言っても殺人現場は市街地なのだ。しかも、歓楽街や繁華街の路地裏と言う場所が主だった現場であり、けっして山奥の話ではないのだ。それで人を食い殺す獣が目撃されないわけではない。それに、そんな猛獣がどこからやって来ると言うのだろう。

犠牲者の数はすでに十二人にも上っている。だがいまだにその犯行を目撃した人間はなく、決定的な物証も見つかってははいないらしい。

巷ではこの不可解でおぞましい事件のことを、まるでホラー映画に出てくるような化け物の事件と捕らえる者もいる。

笑い話ではない。

まるで昔話にある『鬼』が徘徊しているかのような、扇情的な見出しをつける雑誌記事まで書かれているのだ。

もちろん、貴夜はそんな記事を鵜呑みにするタイプの人間ではない。

普段なら笑い飛ばしてしまうだろう。いや、正直ってそんな記事は一片も信じていない。『鬼』なんてものは信じようがないだろう。

だが――。

人が殺されているのは事実だ。どのように無残な殺され方であろうと、それが人間の業とは思えないようなものであろうと、夜の街中で何人も人が死んでいるのは変えようのない現実なのだ。

普段の貴夜ならそこまで不安に駆られることはなかっただろう。だが全身に打ち身を負い、体の自由が利かないいま、そこはかたない不安を覚えても仕方がないのだろう。なにかあった時、頼れるのは己の身体能力だけなのだから……。

自宅まではあとわずかだった。この道の先を進み、二つ目の角を曲がる。するとそこに、いまは十数件しか居住している者のない小さな住宅地が存在する。

その角地にある大きな一軒家が貴夜の住居だった。寂れた雑居ビルが立ち並ぶこの一角は、特に人通りがなかった。二本ほど通りを渡れば、メインストリートにぶつかるのだが、この辺りはすでに開発の波から外れてしまった地域だった。古ぼけたビルの間や細く暗い路地があちこちに存在しているので、余計に想像をかき立てられるシュチュエーションでもあった。

——だからだろうか。

貴夜の耳に、獣の如き低い唸り声が聞こえたのは。思わず足を止め、頼りない外灯の薄ぼんやりとした灯かりを頼りに、辺りの闇の奥を窺った。だがそれ以上、特に妖しい物音も聞えず、不審な人影も見当らない。

（気のせいだよな？）

ホッとしたように息を吐くと、貴夜は肩に掛けたショルダーバッグの位置を直し、再び足を踏み出した。

その途端、逝く手を遮るようにして、黒く大きな影が目の前に現れた。

呆然として貴夜はそれを凝視した。闇の中に、紅い二つの輝きが浮かんでいる。

「——おかしい。確かにあの方の波動を感じたのだが……」

低い、そして擦れたような声で、紅い眼の持ち主は呟いた。日本語ではあるが、どこかイントネーションがおかしい。

闇の中からそれはゆっくりと身を顕わした。

全身を黒いマントのようなもので覆い、貴夜の目線よりかなり高い位置にあるその顔だけが露出している。身長は二メートルに近い大男だった。

街灯の弱々しい光に照らされた男は、短く刈った赤茶けた髪をして、そして尊大な驚鼻と爛々と光る紅い眼を持っている。四角張った顎にも短い髭が生えていた。

日本人ではない。その詳しい人種まではわからないが、きっと欧米人であろう。

「な、なんですか？」

紅い眼に射竦められながらも、その異様な風体の男に向かい、貴夜は問いかけた。

「貴様——何者だ？ 『闇の種族』とは思えないが、貴様からは同族の、しかも『闇の主』^{ダーク・ロード}の持つ波動を感じる。——しかもあの方に極めて近い波動を」

男の声は陰々とした声で男は、貴夜の問いにさらに問い返す。背筋にぞくぞくとしたものが走った。その風体と言い、意味のわからないその言葉といい、どう考えてもこの男は普通じゃない。

「何者って——『闇の主』^{ダーク・ロード}？ なんですかそれ？ ぼくはただの——

「
そう答えながら貴夜は、目立たぬようにゆっくりと後退りした。
すこしずつ距離を置き、一目散に逃げ出そうと考えていた。

（どう見てもコイツはヤバイ！　もしかしたらコイツが通り魔なの
かも……？）

そんな貴夜の考えを知ってか知らずか、その大男は半眼になっ
てなにか考え込んでいた。紅い眼で貴夜を見据えているように見える
のだが、特別にアクションを起こす気配を見せていない。

「——ふん。やはりまだ人間であることは間違いないようだな。覚
醒する以前と言うことか。だが、『闇の主』^{ダーク・ロード}の力を秘めている稀な
存在だ」

男はそう言って幽かな笑みを浮かべた。その笑みは尊大で、真紅
の瞳には無慈悲で邪悪な輝きを宿しているように見えた。

「少年よ。貴様は今宵の獲物に相応しい。我が血肉となり、魂を分
けあう栄誉を貴様に与えよう」

男は大きく唇を歪めた。するとその歯が剥き出しになり、通常の
人間にはあり得ないほど発達した犬歯が剥き出しになった。

貴夜は瞬時に判断し、肩に掛けたバッグを思い切り投げつけた。
そして男に背を向けて一気に走り出す。

足が痛いとか疲れているとかは言っていられなかった。それほど
にあの男からは恐怖を感じていた。身の危険を心の底から覚えたの
だ。

通りから引つ込んだ路地に飛び込み、さらにその奥に向かって走
る。ビルとビルの間にあるこの道を通り切れば、大通りに出て行け

るはずだ。そこなら人通りも多くなるから、あの男もそこまでは追いかけて来ないだろう。

——そう思っていた。だがすぐに、希望は絶望に変わってしまった。

道を一本間違えたことに気づいたのは、そこに壁のようにそそり立つ、コンクリートブロックとその上の金網を見たからだった。

行き止まりだった。袋小路だった。

背後になにかの気配を感じた。微かだがアスファルトの上を歩く音がする。

（アイツなのか？ アイツが追って来たのか？）

貴夜は背中に冷たい汗が吹き出すのを感じた。振り向き、それを確認するのが恐ろしかったが、それでも貴夜は慌てて振り返った。

予想は外れた。振り返った先には、あの不気味な大男は見えなかった。

蒼白い幽かな月の光の下、そこには一人の少女が所在なげに立っていた。どこか落胆したような表情でこちらを見ている。

貴夜は声を失ってしまった。ただ呆然と少女を凝視している。

貴夜は衝撃によって棒立ちになっていたのだ。しかしそれも無理はなかった。

その少女は美しかった。まるで天才職人の手によるビスクドールのような、滑らかで白いその整った貌。白いドレスに身を包んだ、ほっそりとしたその身体。

見た目は貴夜と同年齢らしいが、その落ち着き払った仕草はどこかはるかに年上のものに思える。

月光に照らされたその長い髪は白金に輝いていた。まるで月の光そのものを編みこんだように……。

幽玄の美を体現したような少女。

人の姿をした人ならぬモノ。

貴夜にはどうしても目の前に居る少女が、この世のものとは思えなかった。

不思議な色合いのその瞳は、左右の色を違えている。それがさらにその少女をまるで妖精のような、もしくは天使かとも思えるように見せているのだ。

「あなた——何者なの？ 血族の一人なのかしら？」

少女の声はその外見と同様に美しく、まるで心地良い音楽のような調べを奏でた。だがそれ以上に、貴夜はその言葉を聞いて愕然とした。

それは先ほどの大男が貴夜に問うたのと、まったくおなじ言葉だったからだ。

「ちょっと。なんとか言いなさいよ」

その声には似合わないような言葉であった。口調も苛立たしげだ。だがそのことにより、貴夜の精神状態は現実に対応できるように回復した。

「ぼ、ぼくは……。ちょ、ちょっとまってくれよ！ いきなりなんだよ！ ぼくが何者かだって？ いったいそれがなんだと言っただよ！ 君もあの男のように、『闇の主』^{ダーク・ロード}がどうか言い出すのか？」

貴夜がなかばキレ気味に叫ぶと、次の瞬間、その金髪の少女の表情が強張った。

「いまなんて言ったの？ 『闇の主』^{ダーク・ロード}と、そう言ったわね？ なぜあなたはその言葉を知っていると言うの？ 誰がその言葉を教えたの？」

続けざまに少女は詰問してきた。そしていつの間にか、貴夜と目と鼻の先に近づいていた。

目の前にある少女の、陶磁器のように滑らかなその頬と青と紫の瞳を見つめると、貴夜の頭はぼうつとしてきた。『美し過ぎて恐ろしい』と言う言葉が、まさに当て嵌まる容貌である。

「ねえ、なんで答えないのよ」

少女はさらに顔を近づける。甘い吐息が頬に触れるほどの距離だった。

心臓の鼓動が早く、そして強くなるのを感じた貴夜は、舌が痺れたようになにも答えることができなくなっていた。

「もう、いい加減になにか答えたらどうなのよ。まさかあなたが、世間を騒がせている『オーガ』ではないでしょうね？」

まるで宝石のサファイアとアメジストのような瞳は、魂が吸い込まれるような不思議な力を持っていた。

「だ、だからぼくはそんなこと知らないよ！ 『闇の主』^{ダーク・ロード}だの『オーガ』だの、なにを言っているのかさっぱりだ！ 君こそ何者なんだよ！」

貴夜はその不思議な瞳から強引に顔を背け、その力を振り切った。少女は一步後退し、小首を傾げながら貴夜を凝視した。そして白くたおやかな指を顎に当てる愛らしい仕草で、

「——わたしの思い違いだったかしら？」と、呟いた。

その声には落胆と共に安堵の響きがあるように感じられた。

貴夜の全身から力が抜けていった。緊張に次ぐ緊張を強いられた精神が、いきなり弛緩してしまったのだ。

ガクガクする膝を両手で押さえ、大きく息を吸い込んだ。そしてまだこちらを見つめている金髪の少女を上目遣いで窺うと、少女は鮮やかな笑みを浮かべてこう言った。

「ごめんなさい。どうやら相手を間違えたみたい」

そして少女はゆっくりと後ろを向いた。

その視線の先には、あの不気味なマント姿の大男が立っていた。

始まりの夜 2

2

男は何気ない様子で緩やかに近づいて来た。そして十歩ほどの距離を開けて少女に相対すると、あの厭らしい歯を剥き出しにした笑みを作り、

「これはなんと云う僥倖だろうか。我が前に二人もの『貴き血』の持ち主が姿を顕わすとは。やはりこの地には獲物が濃いと言ったことか」

と、低い嗚咽のような声で呟いた。まるで歓喜に堪えないと言った響きであった。

「ふゝん。あなたが最近この地を騒がしている『オーガ』なのね。これほど短期間に飢えを満たそうとするなんて、あまりにも愚かな行動だと思わないの？」

少女は男の放つ異様な雰囲気、まったく動じていない様子だった。

「そのようなこと貴様が考える必要はない。我は貴様の血肉を受け継ごう。あの方がこの地に存在した名残を追っていて、これほどの血族に出会えるとは、我は真に運のいい男だ。これこそまさに、我こそが『真の主』へ近づくことを神が思召したと言った証に違いない」

男は身を包んでいたマントを広げ、両手を前に突き出した。その

胸には中世の鎧のような胸当てと、両腕には手甲が嵌められていた。胸当ては黒地に金の紋章——二匹の龍が相對している図だ——が描かれていて、腰には長剣が佩かれている。まるでファンタジー世界の戦士のような姿だと思った。

「それでは同胞の少女よ。その身体を我に与えたまえ」

男は慇懃な口調で一礼した。だがその紅い目は、明らかに嘲弄の意を顕わしている。

「お断りよ。それに、わたしはあなたなんかとは違うのだから、勝手に同胞扱いはしないでちょうだい」

少女は動ずることなく、にべもない言葉を返した。

「ほう、同胞ではないと？ どう見ても貴様は『闇の種族』として存在しているではないか？」

「だからと言ってわたしがあなたのように、『血族』であるとは考えないで欲しいわね」

高慢な口調と表情で、少女は腕組してそう言い放った。

「小癪な小娘め！ よくもこの我に向かい、そのような生意気な口を！」

男は激昂し、長剣を引き抜いた。凄まじい殺気が立ち昇り、思わず貴夜はよろめき後退りした。だがその美しい小柄な少女は、冷たい微笑を貼りつかせたまま、

「たかが『オーガ』の分際で、このわたしに向かってそんな口を利

いいのかしら？」

と、さらに挑発するような言葉を叩きつける。

大男は咆哮を上げて少女に飛掛かった。十歩ほどの距離を一気に跳躍して、少女の頭上にその幅の広い禍々しい刃を振り下ろす。貴夜の目が追いていけないほどの、神速とも言える速さだ。

まるで鉈の刃のようにぶ厚く重そうな刃が、凄まじい勢いで少女の美しい金髪に触れようとした瞬間、少女は突然消滅した。いままで存在していた空間から、突如と消えてしまったのだ。

いや、貴夜にはそう見えただけで、実際は、少女は信じられないスピードで横っ飛びにそれを避け、大きく距離を置いて着地していたのだった。

勢い余った長剣の刃はアスファルトの地面を抉り、青白い火花を飛び散らせた。爆弾でも爆発したかのように、そのアスファルトの欠片は四方に碎け跳んだ。

男はすぐに、唸り声と共に長剣を持ち上げると、風を切りながら横薙ぎにその刃を払った。

（やられる！）惨事を予想し、貴夜は思わず目を瞑りそうになった。だがその切っ先が捉えたものは、おぼろげに残る白い少女の残像であり、生身の肉体は、すでに男の頭上遥か高く跳躍していた。

男はにやりと唇を歪め、左手を大きく振り上げた。その指先から銀色の光条が少女に向かって伸びていく。それが大型の短剣であると貴夜が気づいた時には、短剣は少女の胸に吸い込まれる寸前だった。

貴夜は声にならない悲鳴を上げた。少女の白いドレスの胸に禍々しい凶器が突き立ち、鮮やかな紅い色に染まってしまふ映像が脳裏

に浮かんだ。

しかし、そんな状況には至らなかった。少女の胸に突き刺さる前に、重そうな短剣は澄んだ音を立てて跳ね返ったのだ。

少女の胸元に光る環が形作られ、それが盾のように短剣を弾き飛ばしたのだ。

「『環の護り』だと！ 貴様！ 『教会』の魔術を使うのか！」

そう叫んだ男は憤怒の形相で齒を軋ませた。

「あら、防御の術さえあなたは知らないと言うのかしら？」

軽やかに地面に降り立った少女は、憎たらしいほど愛らしい微笑を浮かべ、

「やはりただの『血族』風情が、『黄昏に抗う者』と呼ばれしこのわたし、リーゼロッテ・クリステイナ・シュヴァルツヴェルトに挑むなど、あまりにも愚かしい行動だったわね。彼我の力の差を認識できないようでは、『真の主』などなれるわけがないわ」

と、嘲笑うようにしてそう言った。

紅い髪と目の男は、少女の言葉を聞いた瞬間、凄まじい衝撃を受けたように身体を強張らせ、大きく目を見開いた。

「なんと……。『旧きもの（エルダー）』であるとは思っていたが……。まさか——このような地に『七主』の一人が？」

男は信じられないものを見るような表情で、少女の顔を凝視しながら呟いた。

「あら、あなたはわたしを感知したのではなかったのかしら？ それほご愁傷様ね。まあ、いまなら見逃してあげる。いまのわたしはちよつとだけ気分もいいから。だからこの少年のことは諦めて、さつさとねぐらに帰りなさい」

屈辱に青白い頬をさらに蒼褪めさせ、男は後ろ向きに跳躍した。その高さは絶対に人間のものではなかった。七階建てのビルの屋上まで、膝を大きく曲げる風もなく、一気に跳躍したのだから……。

貴夜は呆然とその姿を見上げていた。これが夢ではないと知りながら、夢の中の出来事であつて欲しいと望んだ。

だが男の、屈辱に満ちた憤怒の怒声は、貴夜の鼓膜を確かに震わせる。

「今宵は退くとしよう、美しき『主』^{ロード}よ。だが貴様のその血、そして肉と魂を得る為に、我は再び貴様の前に現れよう」

男の姿はその声を響かせ、闇の中に消えて行つた。

「さて、あなたをどうすればよいのかしらねえ」

呆然と男を見送つた貴夜に、少女は可憐な笑みを見せてそう言つた。

「ど、どうするって……？」

少女の言葉の意味が理解できず、貴夜はただオウム返しにそう聞き返す。

「バカねえ。あの『血族』の男は、またあなたを狙ってくるに違いないのよ？ 今回は偶々わたしが居合わせたから撤退してだけなの。

あなたはあの『血族』にとって、類稀なる獲物なんですもの」

「え、獲物？　なんでぼくが狙われなきゃならないんだよ！」

「だって——あなたは『貴種』なんですもの。わたしとおなじ『主』^{ロード}に変化することのできる、この世界でも特別な存在なのよ」

少女の艶やかな微笑が、妙に揶揄するようなものに見えた貴夜は、急に腹が立ってしまった。

「いい加減にしてくれよ！　いつたいなんなんだよ『主』^{ロード}って言うのは？　ぼくがなんでそんなものになるって言うんだ？　そんなのぼくに関係ない！」

苛立ち紛れに貴夜は叫んだ。途端に少女の笑みが強張った。

「な、なによ！　助けてあげたって言うのに、なんでわたしが怒鳴られなければならないって言うのよ！　あなたが『主』^{ロード}の素養があるのはわたしの所為じゃないわ！　それに、あの『血族』に狙われるのだってあなた自身の問題じゃない！」

良く言えば人形みたいに整った、悪く言えば無機質なその表情を崩し、少女は感情も顕わに叫び返してきた。

「だって——だって君はさっき、勘違いだったと言ったじゃないか。相手を間違えたって言ったじゃないか」

自分でも言い掛かりに近い、わけのわからないことで怒っているのは理解していた。だが、目の前で起きた非現実的な情景と圧倒的な恐怖が、貴夜にそのストレスを吐き出すことを強いていたのだ。

「それは間違えるわよ！ まさか覚醒してもいない人間のあなたが、あれほどあの方に似た波動を発しているなんて考えられなかったんだもの！ それに、あの『血族』だってあなたのことを『主^{ロード}』だと認識していたじゃないの！ どちらにしても、わたしがあなたの命を助けたことに変わりないわ！」

少女はムキになって言い返してきた。それは、さきほどの超人的な行動を見せた者との、非常にギャップが激しい仕草でもあった。怒っているながらも愛らしい、普通の——普通ではないほど美しいが——人間の少女のような反応だったのだ。

「いや——だ、だからさ、君の言っていることが理解できないんだけど……」

その顔を近づけてくる少女の剣幕に圧倒され、しどろもどろになってしまった貴夜は、力なく両手を挙げた。

「理解できない？ ああ——そうねえ、あなたはまだ人間ですものね」

少女はそう言ってようやく落ち着いていたようだった。何度も小さく頷きながら、ぶつぶつと口の中で呟いている。

「仕方ないわね。このまま放って置くわけにもいかないし……」

大きく憂鬱そうな溜め息を吐いた後、少女は右手を差し伸べた。握手を要請したのだと思い、貴夜はその手を握る。白く細い、そして冷たい感触の小さな手は、驚くほど柔らかかった。貴夜は妙にどぎまぎとしてしまう。

「なにをしているのかしら？ 違うわよ。騎士の如くその手にキスをして、わたしに対する契約の証を返しなさい」

すると少女は命令口調でそう命じてきた。いままでと違う、まるで女王が発するような威厳たつぷりな口調だった。

貴夜は慌てて手を離し、少女の言葉に従った。白いたおやかな指をそろえて突き出されたその手を恭しく取り、軽くその甲に口づけする。

「これであなたとわたしに契約が生まれたわ。わたしはあなたを導き護り、あなたはわたしに従う。わかったわね」

少女は手を引くと、にんまりとした笑みを浮かべた。

始まりの夜 3

3

——騙された。いや、そうではないのだろう。だがこの展開に、貴夜はついていけなかったのだ。

少女に促されるまま、貴夜は自宅に少女を連れ帰った。幸い姉の初音はまだ帰宅していなかったので、すんなり少女を部屋に招き入れることができた。

もし姉が自室に少女を——ましてや人間離れした美しいこの少女を——連れ込んでいる貴夜の姿を見たのなら、どれほどの大騒ぎになることやら……。

そう思うと貴夜はわずかに身震いした。

幸いといっていいのか、姉は今日も遅くなるはずだ。

地元の音楽大学に通う姉の初音は、近々行なわれる大学内のコンクールの為、遅くまでレッスンに励んでいるだろうから……。

安堵しながらも、それでもそろそろと廊下を進む貴夜であった。

少女は貴夜の部屋にあるベッドの上に腰掛け、部屋のあちこちを見回している。好奇心も顕わに、目を輝かしている。考えてみれば自分の部屋に年頃の少女を招いたことは初めてだったが、貴夜にはその事実緊張する余裕もなかった。それに、どちらにしても二人きりではなかったのだ。

貴夜の家に向かう途中、リーゼロッテと名乗った金髪の少女は、

小さな女の子を待たせていたのだ。

シェラとリーゼロッテが呼んだその女の子は、まだ小学校低学年ほどに見える少女で、漆黒の豊かな髪に鮮やかな赤の大きなリボンを飾った、これまた愛らしい少女であった。惜しむらくはその表情に、ほとんど感情と言うものが顕われないことだろう。ただ古めかしい黒のドレスに身を包んだ少女は、まるでフランス人形のように愛らしく、リーゼロッテと同様に貴夜に緊張を強いていた。

シェラは無駄口を一つも叩くことなく、リーゼロッテの隣にちょこんと座り、貴夜が淹れた温かいミルクティーを飲んでいる。まるで小さな貴婦人の如く、気品溢れる仕草であった。だがそれは、この可憐な少女がやはり見た目通りの、年相応の人間ではないと言う証になっている。

「さて、そろそろ説明してくれないかな？　ぼくがいったい何者だというのか。そして君達は何者なのかを」

貴夜は自分の机の椅子に座り込み、疲れたような声でリーゼロッテに問う。

ベッドに両手を突き、四つん這いになって体勢で、床に置いてあるテーブルの上のノートパソコンを、興味深げに見つめていたリーゼロッテは、慌てて居住まいを正した。そして軽く咳払いをすると、厳肅そうな面持ちを取り繕う。

「それでは教えましょう。まずわたし達が何者なのか」

リーゼロッテは両目を瞑り、歌うような声で話し始めた。

「わたし達は『闇の種族』と一部の人間に呼ばれている、人の種を

超えた存在なのよ。まあ、一般的には吸血鬼だの人狼だの、そして鬼だとか呼ばれている不死の生命体。それがわたし達なの。ただわたし達も人間から発生する存在で、その精神構造はそれほど人と違うものではないわ」

貴夜は目をぱちくりさせ、リーゼロッテの言葉を反芻した。それは到底信じられるものではない。特にオカルトなど信じない貴夜にしてみれば……。

だがいまの貴夜には、彼女の言葉を否定する気にはなれなかった。すべてを信じるというわけではないが、つい一時間前に行なわれたリーゼロッテとあの犬男とのやり取りを、この目ではつきりと目撃していたからだ。それでも……。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。いくらなんでも吸血鬼とか狼男ってのは信じられないなあ。『闇の種族』って言うのは、要するにモンスターだと言うのかい？　それで、君らも血を吸うのか？」

「だから一般の人間が認識するのなら、そう言う存在になるってことよ。世界各地で伝承や伝説が残っているでしょう。人間は『闇の種族』と一括りに称しているけれど、『不死者』^{ノスフェラトゥ}のすべてが怪物みたいな言い方は気に食わないわ。それに、わたしがそんな化け物に見える？」

「それは——見えないけど……。でも、君も人間の血を吸うんだろ？　それじゃモンスターと言われても仕方がないと思うけれど」

貴夜の言葉に、リーゼロッテはわずかに傷ついた表情を浮かべた。

「——確かに多くの『闇の種族』はそうでしょうね。エネルギーを

もつとも有効に摂取できる手段ですもの。でもわたしはいわゆる吸血鬼とは違うわ」

リーゼロッテは身を乗り出し、貴夜の目を覗き込むようにして迫ってきた。

思わず貴夜は身を引こうとしたが、リーゼロッテの赤と青の瞳に見つめられ、体中が強張ったように動けなくなった。

「あなただって——『闇の種族』の種を持っているのよ。しかも普通の人間よりも強い種を」

「ぼくが？　なんでぼくが……」

「人間からわたし達『闇の種族』が発生すると言ったでしょう。わたし達だって木の股から生まれたり、なにもないところから湧いて出たりするわけではないの。もつとも、その多くは『血族』としてか『従者』として人間から変容してしまうのですけどね。でも、あなたはわたしのような『主』^{ロード}として覚醒する素養があるわ」

「それって——どういう意味なんだい？　『血族』に『従者』、そして『主』^{ロード}とか、その違いはなんなんだよ。それに、吸血鬼も鬼もましてや狼男も一緒にたにされているのはなぜなんだい？」

貴夜はすでにリーゼロッテの言葉に興味をそそられていて、信用するとかしないとかは二の次になっていた。現実に対応しなければ、自分は死んでしまうのだから、荒唐無稽な話でも信じざるを得ないと言っのも理由だったが……。

「それは『闇の種族』と言っものが、多くの吸血鬼伝説から名づけられたからなのよ。元々吸血鬼伝承と言っのはスラブ系民族が発祥のもので、クロアチア語やセルビア語で吸血鬼を表わすヴォルコド

ラークと言う言葉が、『狼の毛皮をかぶった人間』を意味するところから来ているの。

近代では別の怪物だとされているけれど、元来、人間とは違った人間のことをすべて『闇の種族』とすべきなのよ。結局、人類がその土地と風土により、名称をつけてそう区別していく内に、吸血鬼と人狼、そして様々な悪鬼が別の存在だと思われるようになっただけなの。

因みに『闇の種族』にはまず、『主^{ロード}』と呼ばれる者が存在するわ。それは始原のものであり、原初に現れたるもの。人間と言う生物から分かれた、それ以上の能力を持つある意味超人類と考えられる者たちのことよ」

そこでリーゼロッテは自嘲気味な、暗い笑みを浮かべた。

「——まあ、その能力自体は昔の人間が神とさえ感じたことでしょうね。もっとも、そのメンタリティは人間とそう変わらないわ。ただ長く生きていると、ちよつと変わり者になってしまうのだけど……」

貴夜はそんなリーゼロッテの様子を怪訝に思ったが、なにも言わずに彼女が話を続けるのを待った。リーゼロッテはやがて桜色の唇を開き、また元の口調に戻って説明を再開した。

「『血族』と『従者』は——まあ、簡単に説明すれば、『主』によって生み出されたこれもまた人外の生き物ってことね。

あなただって吸血鬼が吸血行為によってその仲間を増やすと言う伝承は知っているでしょう。その結果、『血族』と『従者』が造られるのよ」

「血を吸われた人間が吸血鬼になるってのは、昔映画でも見たこと

あるけれど、それが『従者』と『血族』にわかれるのはどうしてなんだい？ それに、狼男や鬼はどうやって仲間を造りだすんだよ」

「だから言っただでしょ。もとは吸血鬼だろうが人狼だろうがおなじ存在なのよ。それに、吸血行為だけが『血族』達を造りだす行為ではないわ。『血族』は文字通りの意味で、『主』^{ロート}にとつての『仔』なのよ。血を分けた一族の意味ね。『従者』の言葉の意味はわかるわよね？ 一族の中ではただの従僕で使用人のことよ」

「ああ、それはわかるよ。でも、どうしてそんな違いがでるのさ。どちらにしても『闇の種族』であるのは変わらないだろう？ 『主』^{ロート}だとか『血族』だとか『従者』だとか、なんだかまるで人間とおなじように差別社会だな」

すっかり温くなったコーヒーを啜り、貴夜はボソリと呟いた。

「まあ、仕方がないんじゃないのかしら。しよせん元々が人間だったものなのだから。なんと言つても、その出自によつて能力の差は大きいんですもの。『主』^{ロート}はあくまでもその頂点に位置し、『従者』はいつまでも僕に過ぎないわ。

もつとも、『血族』だけはちよつと特別な存在だけれど……」

リーゼロッテは愁眉を寄せて声を途絶えさせた。

「特別な存在？」

「ええ——そうね。『血族』と言う者は『主』^{ロート}の一族として加えられることはさつき教えたわね。つまり、『主』^{ロート}ほどの力を最初から持っているわけではないにしても、長い生の間に、『主』^{ロート}と変わらない力を得る者も居るわ。『古の者』^{エルダー}とも呼ばれる彼らの中には、

自らを『闇の貴族』とも名乗って、この人間の世界に自分たちの社会を造り上げている者も存在しているの。しかも人間社会の中で成功している者もいるわ。なんと言ってもこの世にもっとも多い『闇の種族』は、彼ら『血族』なの。だから通常、『闇の種族』と呼ばれているのは彼ら『血族』のことだわ。きつとあなたが——普通の人間達が知っているヴァンパイアのイメージに近いのは彼らのことね」

「へえ、それじゃ『主^{ロード}』って言うのは希^{レア}少な存在なんだ？」

貴夜はおどけたようにしてそう言った。急に詰め込まれた闇の知識に、少々疲れ始めていたのだが、それを悟られないように陽気な声を出したつもりだった。

「——信じていないのね？」

リーゼロッテが唇を尖らせた。

「えっ？ い、いや、そんなことはないよ。ただいきなり色んなことを教えられたので、ちよっと脳が疲れ始めているのさ」

貴夜は慌てて取り繕うように言いわけした。

ただ実際に、精神的な疲れと空腹が思考の妨げになっているのは明らかだ。もう夕食を摂らないまま、午後十時を過ぎてしまっている。

「ところでおなかは空いていないの——？」

貴夜はそう訊ねた後、慌てて口を閉じ、リーゼロッテの顔を窺った。

リーゼロッテが人間ではないのだと、今時分が語っていた『闇の種族』とか言う存在なのだと失念していたのだ。

リーゼロッテの食事と言うものを想像して、一瞬だが、彼女が貴夜の首に咬みついていている場面を想像してしまう。

だが、リーゼロッテの応えは貴夜が危惧していたようなものではなかった。

「そう言うってくれるのを待っていたの」

はにかみながらリーゼロッテは微笑んだ。

「正直言って、わたしは空腹で死にそうだったのよ」

「それじゃあ、とりあえずなにか食べ——」

そこで思わず言葉を失った貴夜は、恐る恐る訊ねた。

「君はどう言っただものを食べる——いや、なにか食べたいものはあるのかい？」

リーゼロッテはくすくすと笑い、

「なにを心配しているのよ？ わたしは人間とおなじものを食べるわ。別に生き血なんて欲しくないし。ああ、でも日本食にはまだ慣れていないから、ナットウとかスシなんてのは無しにして」

始まりの夜 4

4

「あの少年をどうしようと言つのですか、ミレディ？」

貴夜が部屋を出たのを見送った後、彼が退室するのを待っていたかのように、シエラがそう口を開いた。

「あら、別にどうしようなんて思っていないわ。ただあの『血族』から守ってあげなければ思っただけよ」
リーゼロッテは明るい口調でそう答えた。

「なぜあの少年を守ろうとするのです？ 我々の目的には関係ないことではありませんか。私達はあの方の行方を追う為に、この極東の島国へやって来たのですよ。ヨーロッパを離れてまでここに訪れたのは、『血族』の一人を滅ぼす為でも、ましてや人間の少年をそれから守ることもありません」

シエラの声は普段と変わらず、平板で淡々としていた。はつきりとリーゼロッテを批難しているわけではないが、リーゼロッテの行動を諷めようとしているのは間違いない。

「あの方を追う為にも、あの『血族』を捕まえないならならぬよ。それにはタカヤを見張っているのが一番だわ。あの『血族』は、タカヤの血に潜むその力を得ようと考えているに違いないのだから、自分でも言い逃れだとかわかっていた。正論ではあるが、理由としては弱いのだ。しょせん、リーゼロッテたちにとっては『血族』も、そして『主』^{ロード}の資質を持つと言つてもただの人間に対し、積極的に

関わる必要はまったくないのだ。

「あの『血族』があの方に関わりがあると言うのですか？ 確かに、あの『血族』の波動はあの方に似ているものでした。ですがそれは、あの『血族』があの方の眷族の一人であると言うに過ぎないのでは？ あの方の係累はこの二百年の間に、世界中で増え続けていますから、特に珍しいものではないでしょう？」

それはそうだ。あの方が変わってしまい、己の『血族』を無制限に増やしていった結果、あの方の『貴き血脈』は増え続けている。だからこそ、リーゼロッテはあの方の波動をはつきりと感知し辛いものになっているのだ。あの方はあまりにも無造作に『血族』を増やしすぎている。現在の苦労の原因がそれなのだから……。

それでも――。

リーゼロッテにはどうにも引つ掛かるものがあるのだ。

確かにあの現場に訪れるきっかけとなったのは、あの傲慢な『血族』の波動を感知したからだ。だがその場に辿り着いた時点で、リーゼロッテが感じた大きな波動は、貴夜と言うその存在からであった。

貴夜は明らかに普通の人間だ。『主^{ロード}』の資質を過分に秘めているとは言え、現状ではあのように凄まじい波動を放つものではない。だからこそ、リーゼロッテは勘違いしたのだ。

あの方自身がそこに居るのだと……。

シエラは淡々として言葉を続けた。リーゼロッテの思考を読んでいるのだろうか、主人の答えを聞かぬ内に、自分の考えをさらに説明しようとする。

「あの方がこの国にやって来たのは間違いないでしょう。そして、

あの『血族』もあの方を求めてやって来たに違いません。この地ではここ最近、明らかに『闇に種族』の仕業と思われる事件が起きているそうです。次々に獲物を狩りだしているのはあの『血族』に間違いありません。その目的は――」

「あの方を喰らい、己が『真の王』の座に就こうとしている――でしよう？ 自分より旧い、上位の『血族』や『主』^{ロード}を喰らってその力を得ようとするのは、『血族』には珍しくない考えだわ。まあ、あの方があのような『オーガ』などに『喰われる』など有り無いけれどね。

――わたしだってそんなことはわかっているのよ」

事もなげにリーゼロッテはシエラの説明を遮った。

「ならばあのような者、放って置いても良いのではありませんか？ ミレディが関わる必要などありません。たとえあの者の行動を見張っていたとしても、到底あの方に辿り着けるとは思いません」

当然の如く、シエラは反論をやめる事はない。こうなってしまうば、議論をし尽くしても無駄だった。シエラは本当に強情な使い魔なのだ。

だがそんなシエラも、次に発せられたリーゼロッテの言葉に沈黙した。

「あんな『オーガ』なんかどうでもいいのよ。でも、タカヤには興味があるわ。なんて言ってもあの方にほぼ等しい波動を発散する『主』^{ロード}――いえ、『主』^{ロード}の資質のある人間ね――などこの八百年の間、まったく見たことはなかったわ。タカヤはきっと、あの方に繋がる人間よ」

リーゼロッテの自信溢れる表情を見て、シエラはわずかに眉を顰

めた。

「——でもそれはミレディの憶測に過ぎません。あの方がこの国に渡ったのは十八年前、あの少年があなたの方とどう関わったと思われるのです？ それに、ミレディはあの方の波動を感じたと仰りますが、私にはなにも感じられません。もちろん、あの少年が『主^{ロート}』たる資質を備えているのは感知できますが……」

「ばかね。あの方の波動を感じられるのは、あの方の直接の『血族』か、わたしのような『養い子』くらいのものだわ。いくらあなたがあの方に造られた『使い魔』であろうとも、そうそう感知できるはないの」

リーゼロッテが自慢げにそう言い張ると、シエラは幾分面白くなさそうな顔をした。表情の変化の乏しいシエラにしては、それでも大きな変化である。

「そう言うものでしょうか……？」

「そうなのよ！ それでわたしはタカヤとしばらくは一緒に居ようと思うの。それに、あの『血族』のことも少々気になるしね」

貴夜が両手にトレイを抱え、階段を昇りきると、部屋の中からリーゼロッテの声が聞えてきた。なにやらシエラに向かって熱弁をふるっているようだった。

「どうしたの？ とりあえず食事を持ってきたんだけど……」

貴夜が部屋に入るなりそう問いかけると、リーゼロッテは片手を振って「なんでもないわ」と事もなげに答えた。シエラは無表情の

まま、視線を貴夜から外した。

「なにか言い合いをしていたように聞えたけど――」

「言い合い？　言い合いなんかになるわけないでしょ？」と、リーゼロッテ。

貴夜は料理を載せたトレイをテーブルの上に置くと、

「それならいいんだけど……」と呟き、シェラの様子を窺った。

シェラはそっぽを向くようにしているが、その表情にはなんの感情も表れていないようだ。

「そんなことより早く食べましょうよ。わたし、今日はなんにも食べていないのよ」

そう言いながらリーゼロッテはトレイの上を凝視していた。

トレイには三人分のビーフ・シチューの皿、そしてフランスパンをカットしたものとサラダの入ったボールが三つ。

暖め直されたシチューの芳香にリーゼロッテは頬を緩ませ、その瞳は魅せられたように釘づけにされている。

「ああ――どうぞ。口に合うかわからないけど……」

そう言ってスプーンを手渡すと、リーゼロッテはにっこりと艶やかな笑みを浮かべた。

「ありがとう、タカヤ」

そして――。

スプーンを握ったリーゼロッテは健啖な食欲を貴夜に見せつけた。

あくまでも品良く、小さく口を開けて食べ物を口にするのだが、その手は休むことなく、あっと言う間に自分の皿のシチューをたい

らげてしまった。

シチューはまだ残っている。姉がシチューを作る時は大鍋で大量に作り、それを小分けして冷凍するのだ。自分が夕食を用意できない時に、それを温めるだけで貴夜が食べられるように……。

スライスしたフランスパンで、名残惜しそうに皿を拭っているリーゼロッテに向かい、

「温めればまだあるんだけど……」

と、貴夜はおずおずと告げた。

途端に目を輝かせ、リーゼロッテは天使の微笑を浮かべる。突き出された両手には、汚れ一つない白い陶器があった。

無言で差し出された綺麗になった皿を、貴夜はそろそろと受け取った。

「君はいいの？」

黙々と小さな手でパンを噛んでいるシェラに、貴夜は優しく訊ねる。

「私は結構です」

無感情にそう答えるシェラの皿は、まったく手がつけられていなかった。まったくもって子供らしくない言葉だと貴夜は感じた。

「ビーフ・シチューは嫌いだったのかい？」

「いいえ。私は元来小食なだけです。気になさらないで下さい」

そう答えたシェラの皿を、リーゼロッテはすかさず自分の手に取る。

「そうそう。シェラはあまり肉類を好まないのよね？」

そしてまた、リーゼロッテの右手に光る銀の匙——ただのステン

レス製だが――は、すこし冷めかかったシチューを掬い始めた。

結局、リーゼロッテは四杯ものシチューと一本丸ごとのフランスパンを平らげた。見かけによらぬその食欲に、貴夜はただ呆然とするだけだった。

（あの細い身体に、よくもまああんなに詰め込まれるものだなあ……）

食後に淹れた紅茶を飲みながら、優雅な仕草でカップを口に運ぶリーゼロッテを見て、感慨深く貴夜はそう思った。

「満足してもらえたかな？」

その表情を見ればすでにわかり切っていたことだが、貴夜はリーゼロッテに問いかけた。

「ええ、もちろんだわ。あのシチューは絶品だったもの。あれはあなたが作ったものなのかしら？」

「いや、あれは姉さんが作ったものだよ。気が向くと大量に作り置きしているんだ。ぼくが一人で居る時の為に……」

「そう……。あなたはその人に愛されているのね」

そう言って微笑むリーゼロッテの瞳に、微かな羨望の色が現れていた。もつとも、貴夜はそれに気づかず、

「はい？　そ、それはどうなのかな……？」と、奇妙な返事を返す。途端にリーゼロッテの瞳が、燃え上がるような輝きを見せた。それは剣呑な輝きを秘めた不思議なほど美しいものだった。

「タカヤ！ あなたはあのような料理をいつも食べていながら、その作り手の愛情を感じていないの！」

リーゼロッテは怒ったように問い質した。

「へっ？ なななにを言っているんだい？」

リーゼロッテの放つ圧力に、貴夜は思わず後退りしてしまう。

「あの料理は食べる者への——あなたへの愛情に満ちていたわ。それを気づかないとは、なんてあなたは薄情な男なの！」

リーゼロッテは冷たい怒りと呆れたような表情の入り混じった顔をしていた。

「は、薄情？ な、なんでぼくが薄情だって言うのさ！ ぼくだって初ネエにはいつも感謝しているよ！ で、でも、そのシチューに愛情がこもっているとかわれても、ただ美味しいとしか思っていないよ！」

「だからそれが薄情だと言っているのよ！ あなたはいつも食べなれているからわからないのだわ！ あの料理は、味も栄養もあなたの為にだけに作られたものだと言うことを主張していたもの」

「な、なんでそんなのがわかるんだよ！ 料理の味なんかでそんなのわかるわけないだろ！」

リーゼロッテの言い草にカチンときた貴夜はそう言い返した。

「わかりますわ。ミレディは『主^{マード}』ですもの」

静かに、そして淡々とした声でシェラがそれに答えた。

「はあ？ 『主^{ローテ}』 ってのはそんな便利なものなのか？」
貴夜は胡乱な視線でシエラを見つめる。その視線に、シエラは真つ向から見返してきた。

「そうですね。 便利な力を持っているのです。 『主^{ローテ}』 と言う存在は」

「ふ……ん？ どう言う原理なのか教えて欲しいね」

胡乱な表情を変えることなく、しかめっ面しく貴夜は訊ねた。

「あなたに理解できるかわかりませんが、これは初步的な『概念解読』になります。 固有の物体に宿る概念と、その製作者の残留思念を読み解くことにより、そのモノの成り立ちや成分、そしてそれに込められた思いを知ることができる、そう言った能力なのです。 もちろん、ミレディはそれを自慢の舌で味わうことによって、あなたの姉の思念を解読したのです」

小面憎いシエラの言葉に、貴夜はちよつとだけムツとした。 理解できないかもしれないだって？ そんなことはない。 小難しい言葉で煙に巻いているような説明だったが、貴夜はシエラの言葉を理解していた。 だが、納得はしていない。

「舌で解読したってなんだよ。 味覚でそんなことがわかるのか？ ぼくのことをばかにしているんだらう？」

「そのようなことはありません。 私はミレディの舌の能力を的確に説明しています。 ミレディは類稀な味覚と感性を有しているのです。 もちろんその力が、ミレディの食に対する欲望を基礎とするものであるのは間違いありません」

シエラは平板な調子で、それでいてはつきりと断言する。

「シエラ！ それじゃあ、わたしが食いしん坊だと言っているみたいじゃないの！」

リーゼロッテがいきなり口を挟んだ。

「みたい——ではありません。はっきりとそう言ったのです。だいたいいつもミレディは、食事に対しての欲望が強すぎます。本来、ミレディの肉体はそのようなものを必要としないはずですが」

「そそ、そんなんじゃないわ！ わたしはただ人間の食事を取るこ

とによって、人の心や生き方を忘れないようにしているだけよ！」

「ならばそのように大量に摂取する必要はないと思いますが」

烈火の如く勢い立つリーゼロッテに、シエラは平板な声で返した。

リーゼロッテは齒噛みしながら、なにか言い返そうと考えている。

シエラは冷たいとさえ見える超然とした表情で、自分を睨みつけているリーゼロッテの視線を受け止めていた。その間に見えない火花が散っている。

急に話題から取り残された貴夜は、二人の舌戦——まだ序章に過ぎないだろう——を呆然と見守っていた。だがこのまま放って置いてはいけないと言う、本能の叫びに導かれるままに、違う話題を振らなければと考えた。

「そ、そう言えば君達、やけに日本語が上手いんだね？」

一触即発の空気の中、貴夜は二人の気を逸らすように話しかけた。

二人は同時に貴夜を見て、そして顔を見合わせる。やがてクスリと笑ってリーゼロッテが口を開いた。

「あたりまえよ。なんと言っても、あなたの言葉を借りているんですもの」

「ぼくの言葉？」

「ええ、あなたと話す時はあなたの言葉を使っているのよ。実際はわたしの知識の中に、日本語なんてありはしないもの。あなたの語彙であなたに話しかけているだけよ」

「それじゃ——あの男と話していたのは……？」

「ああ、あれはあなたの思念をトレースしていたから。だからあなたには日本語で聞えていただけよ。どのように変換されているかわからないけれど、わたし達の言葉は、あなたの中にある語彙と語感によって作られているはずよ」

「ぼくの中の語彙？」

「その通りです。私達の言葉はすべて、あなたの知識にある言葉に変換されてあなたに聞えているのです。私達の思考は母国語でありまずし、あなたに話しかける際もそのままです。でも、あなたに向かって口に出される瞬間、それはあなた達の国の言葉に変換されるのです」

シェラの重ねた説明によって、ようやく貴夜にその意味するところが理解された。

「なるほど……。原理は良くわからないけれど、君らは対話する人間の思考を読み、そしてその相手の理解できる言葉で会話できると言うわけだな？　だけど本当にその言葉の意味を理解して話しているわけではないと」

「なかなか飲み込みがいいじゃない。だからわたしの口調がこんなのも、あなたの語彙のせいなんだからね」

腰に両手を当て、胸を張るようにして貴夜を見上げるリーゼロッテの姿を見て、まるで『闇の種族』と言う人外存在などとは思えなかった。

「ちょっと！　本当にわかっている？」

「う、うん、わかった」

ぼんやりとリーゼロッテの姿に見惚れていた貴夜は、慌ててそう答える。

リーゼロッテは満足気な笑みを浮かべ、何度も頷いた。そんな様子を見て、シエラは軽い吐息を漏らした。

「ところで——この家には他に誰も住んでいないの？」

「いまはいないけど、もうすぐ姉さんが帰ってくるはずだよ」

リーゼロッテの問いに、貴夜はすぐに答えた。

「そう。それじゃあ——取りあえず部屋はいくつも余っているわね」

「それは——どういう意味さ？」

貴夜は胡乱そうにリーゼロッテを見やった。

「わたし達の部屋があるか確認したに決まっているでしょ」

「君達の部屋？　それって——まさかぼくの家泊まるつもりなん

じゃ……」

「だからそう言っているのでしょ！」

「ちょっと——待ってくれよ！ そんなこと——」

——無理に決まっている。貴夜がそう言い掛けた時、階下から姉の初音の声が響いた。

「ただいま。お姉さまのお帰りだぞ！」

その声から、大分聞き召しているようだった。

貴夜の顔色は一気に蒼ざめていった。

聖なる騎士

「あれが『黄昏に抗う者』と呼ばれし『七主』の一人なのだろうか……？」

黒いロングコートを羽織った男は、古びたビルの屋上でそう呟いた。

ヴィトリオ・エルレツィ。それが彼の名前だった。

ヴィトリオは眉を顰め、眼下の一軒家で繰り広げられた喧騒を見つめながら、己がいままで教えられたことを、そして『十字軍』の『異端処理官』として経験してきたすべてを、いとも簡単に否定されたような気がしていた。

どこか釈然としない思いのまま、ヴィトリオは術を解いた。

『魔術師の目』ウィザード・アイの呪文は比較的初步の魔術だ。遠くの対象を監視する目的に使われるその魔術は、通常は『使い魔』を通して使用される。

だがヴィトリオには『使い魔』などない。だからその魔術は一般の『魔術師の目』ウィザード・アイとは微妙に違うものでもあった。精度は及ばないが『使い魔』をその場に置く必要はない。

ヴィトリオは『聖騎士』の位階にある『異端処理官』として、この日本に派遣されてきた。つまりは『闇の種族』ダーク・レイスと呼ばれている神の敵対者を滅殺する為に……。

だがヴィトリオに下された使命は、『七主』であるリーゼロッツ

テ・クリスティーナ・エツシェンバッハに対するものではない。この街で多数の犠牲者を生み出している、『食人鬼^{オーガ}』と分類される『闇の種族^{ダーク・レイス}』であるジャン・ルイ・オートブレーブがターゲットなのだ。

ジャンはパリで生まれた『血族』だった。しかも『七主』の第一位たる『真王』の『血族』だと確認されていた。

だからであろう、まだ『闇の種族^{ダーク・レイス}』としては二百年ほどの『血族』であるが、その能力は千年の生を経た『旧きもの（エルダー）』に匹敵するらしい。しかも『食人鬼』として犠牲者の血と肉と魂、つまりすべての物を奪い取るだけに、その力の上昇率も高い。しかも彼は――。

いや、彼の過去などはどうでも良い。ヴィトリオの獲物としては最上級の『異端者』なの間違いないのだ。この任務に対して、ヴィトリオはその能力のすべてを使わなければならないだろう。それほどの難敵なのだ。

しかし……。

ヴィトリオは偶然にも、それよりもさらに手強く、恐ろしい『異端者』を発見してしまった。それがあのリーゼロッテと言う名の美少女であり、『黄昏に抗う者』の通り名を持つ、始原の脅威である『七主』の一人であった。

『教会』からは『七主』に対する敵対行動は諫められている。それはあまりにも危険で、魔術の奥儀を極めた者であろうと、『聖騎士』と呼ばれている神の戦士であろうと、その手に余る存在だから

である。

究極の『魔人』である七人の『闇の主』。その力はまさに『魔神』と比肩すべき存在であり、究極の力の象徴でもあった。

神の恩恵を受けしヴィトリオであろうとも、『血族』と同等の戦闘力を誇る『聖騎士』である彼であろうとも、その戦闘力には天と地の差があるのだ。触れるべき存在ではない。それにヴィトリオが『七主』と敵対することは、決して教会が許してはくれないだろう。危険だからと言う理由だけではないのだ。

しかし――。

ヴィトリオは『異端処理官』として『黄昏に抗う者』と言う存在を見逃すことができなかった。そのように教育されていた。

神にあだなす、遍く闇に蔓延る者達を、秘密裏に『処理』するのが自身の役目であり、そして天から与えられた至高の義務なのだ。

「さて――」

ヴィトリオは眉を顰め、今後の行動について計画を見直さねばならないと考えた。

「――どうしたものかな？」

腰の長剣――ヴィアラウディと名づけられた法儀聖剣――の柄を握り、自問の呟きを漏らしたヴィトリオは、答えの出ない思考を潔く停止した。

まずは『オーガ』の始末が先決だ。教会からの任務を終了させな

ければ、『七主』に関わることもできない。それに、『オーガ』一人だけが『処理』の対象ではないのだ。

『オーガ』——ジャン・ルイはこの地に辿り着いてから多くの『従者』を得ている。それがこの街で起きている凄惨な殺人事件の犯人であり、これからも犠牲者を生み出す禍でもあると、ヴィトリオは知っている。

ジャン・ルイは人の血肉を余すところなく喰らい尽す。故に殺人事件の証を残したりしない。つまり事件として死体が残っているものは、すべてマナーのなっていない『従者』の仕業であると判断できる。

『オーガ』が生み出した『オーガ（人喰い鬼）』を屠ることも、いずれヴィトリオの使命に他ならないのだ。

そうと決まれば——。

ヴィトリオはビルの屋上から辺りを睥睨した。

『オーガ』の気配は完全に隠蔽され、いまだ感じられないが、その『従者』である者は、いまだ人の姿で擬装して、今宵も獲物を求めてさすらっているだろう。

ヴィトリオはコートの裾を翻し、たったいま感じ取った血生臭いその気配を辿る為、ビルの屋上から飛び降りた。

まずはあの『オーガ』の僕を処理しなければならない。
大元を断たなければヴィトリオの任務は終了しないが、これから起こるであろう惨劇を無視することもできないのだ。

すくなくともヴィトリオは、『聖騎士』の誓いを神に捧げた、誇り高い慈悲の心を持った聖なる戦士なのだから。

無作為に飛ばした思念の波が、すぐに異形の気を感じた。

それは明らかに人とは違う、確かに『闇の種族』の波動であった。そして闇を屠る『聖騎士』は、闇に紛れて獲物へと向かった。たとえ彼の姿を目撃した者がいても、はつきりとそのすべてを認識できはしないであろう神速のスピードで。

腰に下げられた相棒は、ようやく吸えるであろう魔物の血に、狂喜の波動を放っていた。

（そう急かすな。いまにゆっくりと味あわせてやるよ）

相棒である長剣ヴィアラウディに、心の中でそう言い聞かせると、ヴィトリオは目指す獲物に向かって跳びかかった。

押しかけ師匠

「一体どう言うことなのか説明して」

そう問う初音の声は平板で、寒々とした口調でさえあつた。

一人掛け用のソファに脚を組んで座り、顎を突き出して睥睨する初音の姿は、まるで臣下を見下ろす女王然としていた。

「い、いや、だからその……」

貴夜が口籠もってしまうのは仕方がない。なんと言っても、この世で唯一、貴夜の頭が上らない人物が、この一見たおやかで優しそうな女性であるのだから……。

だがいま初音は、貴夜以外には見せないであろう本性を顕わにしている。それは外での初音とは、まったく違う姿であつた。

柔らかくウェーブした腰まである髪をかき上げ、気だるそうに貴夜を見つめる視線には、苛立ちと困惑を押し殺したような様子が窺えた。

「だからなによ？ どうしてわたしがいないうちに、女の子なんか引つ張り込んでいるの？ それも今夜は泊めたいですって？」

「で、でもそれは——その……」

初音の顔色を窺うようにして、貴夜は言い訳をしようとしたが、初音の氷の視線で睨みつけられると、またもや言葉を継げずにいた。

「そうタカヤを困らせないで欲しいわ。わたしがこの家に住むのは必然なんですからね」

いきなり黙り込んでいたリーゼロッテが、まるで従者に向かって命じるような声で初荷に告げた。

「——あなたは誰なの？ 貴夜とはどういう関係なのかしら？ どう見ても日本の方とは思えませんけど？」

初音の言葉は穏やかであつたが、その口調は冷ややかなものだつた。

「わたしはリーゼロッテ・クリスティーナ・シュヴァルツヴェルト。タカヤの恩人であり、タカヤの師でもあるわ。だからここでタカヤと住む方がどちらにとつても都合がいいの」

負けずに高慢な口調でリーゼロッテは答えた。

「へえ？ 貴夜の恩人で師ねえ？」

「そうよ。わたしがいなかったら、貴夜は今頃死んでいたのよ。それを救い出してあげたの。それに、貴夜はいまだに狙われているから、わたしが護つてあげるのよ」

「死んでいた？ 護つてあげる？ それはどう言うこと？」

その答えに初音は片側の眉を上げ、そして胡乱そうに呟いた。

「決まっているでしょ。貴夜は——」

リーゼロッテが切り口上でそう言いだしたの、貴夜は慌てたよう

に遮った。

「ちょっと待ってくれよ！」

リーゼロッテは横槍を入られたのが面白くないようで、その色の違う両目で貴夜を睨みつけたが、無理に言葉を続けることはなかった。

「ば、ばくは——実はイジメに遭ってたんだ！」

貴夜はそう初音に告げると、唇を噛み締めた。実のところ、これだけは姉に知られたくなかったのだから……。

「イジメ？ それはどう言うこと？」

初音の声が低く響いた。その声には驚きと、押し殺した怒りに満ちていた。

「誰よ！ 誰があなたを——」

「そ——それは……。言いたくない」

「なぜ？ なぜ言えないのよ！」

「姉さんがそんなだから言いたくないんだよ……」

力なく貴夜は呟いた。

取りあえずリーゼロッテの言葉を誤魔化す為に言ってしまったとは言え、誰にも増して姉には知られたくなかった。もし知られたの

なら……。

貴夜は三年前のことを思い出し、思わず身震いする。

貴夜が中学生の時分、やはり貴夜は一部の生徒に目をつけられていた。そして生傷の絶えない生活を三ヶ月ほど過ごしていた。いま思い起こせば、あの時の方が酷い状況だったように思われる。

三ヶ月の間、現在のように誰にも気づかれないうちに過ごした。もちろん、姉にだけは絶対に知られないように注意していた。

しかし姉の目をいつもでも誤魔化せはしなかった。それに、その時分の相手は幼く、それにあまり頭の良い方でもなく、目立つ場所に傷を付けられてしまっていたからだ。

母親を失ってから、自分がその代わりになることを誓った姉の怒りは大きく、凄まじかった。

まだ高校生の初音が、その親に文句をつけても埒が明かないと判断したのだろう。

初音は貴夜に暴力を振るっていた本人に、直接的な『抗議』をしたらしいのだ。

その現場を貴夜が目撃したわけではない。だからその内容はさっぱりわからないが、イジメグループの連中は、貴夜を見ると恐怖の表情で、まるで逃げるみたいにしてに去って行くようになった。

一応それで貴夜の生活に平穩が訪れたのだが、ありがたくない噂も広まってしまったのも事実である。

「ちょっと、そんなんだからってどう言う意味よ？」

初音は剥れたような顔で問う。

「い、いや——だからさ、ぼくが自分で決着をつけようと考えていたんだ。それに、顕人だってぼくを助けてくれるんだ。今日は偶々一人のところを狙われてしまったんだよ」

「そう……。顕人は知っているのね？」

「ああ、そうだよ」

そう貴夜が答えると、初音は眉を顰めるようにして、疑惑の視線を貴夜に向けた。

「——まあ、いいわ。で、そいつらの名前は？ それにこの二人はどう関係しているの？」

真正面から姉に切り込まれ、貴夜はまたもや言葉に詰まる。

苦し紛れの告白に、それ以上の整合性を作り上げるのは難しく、瞬時に答えることができないのだ。

その時であつた。天の助けが意外な人物から降りてきた。

「相手が誰であるかは存じませんが、彼は複数の男に襲われていました。その折に私達が通りかかり、あなたの弟を救い出したのです。そしてその際、私達はパスポートと手持ちの荷を失ってしまったのです。そこであなたの弟がこの家に招待してくれたのです」

いままでは沈黙を守っていたシエラが、淡々と、そして論理的に初音の問いに対して答えたのだ。

初音はその声の主を啞然とした顔で凝視している。

シエラの外見は、どう見てもまだ十歳に満たないであろう子供である。そのいたいけな少女が、整然とした言葉で初音に答えたのだ。初音が戸惑うのも仕方がないことであつた。

「あなた――」

「私はシエラと申します」

初音が問いかけようとすると、先回りしてシエラは短く答えた。

「そ、そう。――ところであなた、年は幾つなの？」

「あなたが思うほど幼くはありません」

「確かに――ね。でも……」

初音はそこで言葉を切ると、わずかに俯いて小さく溜め息を吐いた。

「まあ、いいわ。今夜はもう遅いことだし、いまから出て行けとも

言えないわね。取りあえずあなた達の泊まれる部屋を用意するわ」

「えっ！ いいのかい？」

「こつも簡単に姉がそれを許すとは思わなかった貴夜は、思わずそう訊き返した。

「仕方ないでしょ。こんな夜更けに小さな女の子を放り出すなんて、そこまでわたしは冷たい女じゃないわ」

「それは感謝いたします」

人形のように愛らしい、それでいて平板な表情のまま、シエラは厳かにそう言つて深々と頭を下げた。

「別にいいのよ。部屋はいくらでも余っているのだから」

初音は穏やかな微笑を浮かべ、そう告げた。リーゼロッテに対しての態度とは、まったく言つていいほど正反対のものだった。

「さあ、ミレディもこの方に感謝を」

シエラは静かな声で促した。

「え？ なぜ？」

リーゼロッテは驚いたような顔をした。

「だって——わたしとタカヤはファイティー・ファイティーの関係でしょう？ わたしはタカヤを護り、そして至高の位に導く師匠なのよ。それに対して住居を提供するのはあたりまえじゃないの」

「ミレディ。この家の主人はタカヤではありませんよ。だからあなたは、ハツネに感謝の意を示す必要があるのです」

冷たく言い放つシエラの声に、リーゼロッテは反抗的に見返したが、やがてシエラの澄んだ水色の瞳に気圧されたかの如く、その視線を逸らした。

「——わたし達を受け入れて頂いて感謝いたします。レディ・ハツネ」

リーゼロッテはドレスの裾を軽く引き、優雅に一礼して見せた。そして艶やかな微笑みを浮かべる。

先ほどのわがままな少女のような態度とは一変し、まるで貴族の令嬢の如き優雅さと、華やかな気品を醸し出しているリーゼロッテを見て、初音でさえ感嘆の吐息を漏らす。

「——これでいいかしら？」

リーゼロッテはシエラを横目で見てそう言った。

「大変宜しいですよ。あなたは『貴族』なのですから、礼儀は非常に大切です」

シエラは相変わらず淡々とした声で頷いた。

「あなた達はどう言う関係なの？ どうも姉妹ではなさそうだけれど……」

初音は細い頤に手を当て、訝しむように二人を見やった。

「リーゼロッテ様は私の主人です。私はミレディの従者なのです」

「主人？ あなたそんなに小さいのに……」

初音は複雑な表情を浮かべ、シェラをじっと見つめた。

「——あなたも大変なのね。まあ、いいわ。貴夜とどのような関係なのか、もっと詳しく聞きたいところでもあるし……。とにかく部屋の用意をしましょう」

初音はそう言って貴夜の方に視線を向けた。

「——貴夜にもきちんと説明してもらおうよ」

貴夜はどこか絶望的な予感を覚え、ただ頷くだけだった。

日常

貴夜が教室に入るなり、親友であり唯一の友である神代顕人は、顔を強張らせたままこちらに向かつてきた。そして無言で貴夜の腕を掴むと、押し殺した声で

「ちょっと来い」

と言つて、教室の最後列の窓際——貴夜の席だつた——に引き摺って行く。

「おい、なんだよ？ 腕が痛いよ」

貴夜の文句にも、顕人は無言でそのまま進み続ける。苛立ったようなその様子は、明らかに貴夜の言葉を無視している。

そんな二人の姿を、クラスメート達は様々な目で注視していた。

多くの女生徒は嫉妬と羨望、そしてどこか嬉しそうな目で……。

多くの男子生徒はそれに対して苦々しさを隠さない。

神代顕人は背が高く、そして逞しい四肢を有する美男子だ。茶色っぽい長髪に浅黒い肌。そして栗色の澄んだ瞳を持つ、貴夜とは違った意味で目立つ存在だつた。ワイルドでありながらも知性を感じるその容姿に、女生徒はもちろん、男子生徒からも人気がある男だつた。

女生徒の人気を二分する二人の少年に、教室の生徒達のほとんど

が注目している。

「おい、わかったから、いいから放してくれよ」

教室内の雰囲気を感じて、貴夜は顕人に囁いた。だが顕人はそれに答える様子も見せず、黙って貴夜を椅子に座らせる。まだその手は貴夜の右腕を握ったままだ。

「昨日、俺と別れてからなにがあつた？」

そう問い掛ける顕人の声は低く、怒りと苛立ちを必死で押さえているような、抑揚のない口調だった。

「べ、別になににも——なににもなかったよ」

それは明らかに、なににもなかったような態度ではなかった。

貴夜は嘘が下手な人間ではない。それどころか、涼しい顔で己の心を偽る天才であつた。自分さえも欺くその演技力は、演劇部にスカルトされないことが不思議なほどでもあつた。

——だが、この長年の親友に対しては、いつもその演技力を行使することができない貴夜であつたのだ。

「なににもないってことはないだろ？ それじゃ——」

顕人はいきなり制服のブレザーの袖を捲り上げ、

「——この痣はなんだよ？ 昨日はこんなもの、ついていなかったぞ」

と、鋭い目で睨みつける。

切れ長の涼しげなその眼に、剣呑な輝きが宿っているのを、貴夜は見逃さなかった。

「そ、それは……」

口籠もった貴夜の心を読んでいるのか、顕人は相変わらず怒りを抑えた為に、不自然に淡々とした声で、

「中根達の仕業なんだろう？ いい加減におまえも強情を張るな」と、貴夜以外には聞えないように呟いた。

「それは——どういう意味なんだ？」

そう訊きながらも貴夜にはわかっている。顕人の言葉の意味を……。

顕人が語る貴夜の強情と言うのがなにかは、貴夜自身が良く知っているのだ。

「わかってるだろ？ 俺だっていままで我慢したんだ」

そう答えた顕人は、おもむろに踵を返すと、教室の出口に向かって歩き出した。その鬼気迫る圧力に、クラスメート達は思わず後退りして道を開ける。

顕人が向かう場所がどこであるのか、貴夜はすぐに理解した。顕人は中根達のクラスに向かおうとしているのだ。そしてどうするの

かは明らかだった。

「ちょ、ちよっと待ってくれよ！」

貴夜は慌てて顕人に追いつき、その腕を縋りつくようにして掴んだ。

頭一つ分背の高い顕人は、貴夜の目を覗き込むようにして見つめる。そして穏やかだが不退転の意思を秘めた、静かな声で語りだした。

「いい加減にしろ。いままでおまえが言う通りに黙っていたんだ。おまえは確かに意志が強い。人に迷惑を掛けないとか、卑怯な真似をしたくはないとか、そんなおまえの気持ちは理解できないけれど知ってはいた。でもな……」

おまえ、俺達の気持ちはわかっているのか？ おまえが痛めつけられて、その身体の見えない所に傷つけるのを知っていて、だけど手出ししないでくれと言われている俺の気持ちを。おまえは理解しているのか？」

顕人の厳かとも言えるほど静かな声を聞き、貴夜はなにも答えることができない。

考えてみれば、貴夜の訴えは顕人にとって、失礼で尚且つ酷いものだったのかも知れない。立場が逆であつたなら、貴夜はもどかしさのあまり、気が狂いそうになっていたかも知れないのだ。

それだけ貴夜は顕人を大事に思っていた。つまりそれは、顕人にも当て嵌まることなのだ。

「それに、いまはまだ人目のない場所で、ただ小突かれたりしているだけかも知れないが、それだけにエスカレートした場合、誰もそれを止める者がいないと言うこともあるんだ。それだって俺は心配なんだぜ」

貴夜は素直に自分を恥じた。

顕人の語る言葉は、いままで我慢を重ねた結果なのだ。それに、貴夜自身ならば守れない約束を、いまのいままで守ってくれていたのだ。

自分と顕人との関係を見ると、貴夜が顕人に強いたものは、あまりにも一方的なわがままなものだったに違いない。

だがしかし……。

——まだ譲れない。自分自身が行動もせず、ただ顕人に行動を起こさせるわけにはいかない。

「——ごめん。でも、もう少しだけ待ってくれよ。まだ僕は動いていない。おまえにすべて投げ出したりはできないんだ」

見上げるその目に譲れぬ信念を浮かばせ、貴夜はじつと見つめ返す。

顕人はやがて諦めたように溜め息を吐いた。

「わかったよ。でも次はないからな。もし今度、おまえがおなじ目に遭ったのなら、その時は……」

「だいじょうぶ。ぼくだってやる時はやるのさ」

わずかに微笑みを浮かべ、貴夜は自分の胸を拳で叩いた。

「——でも、もしぼくがしくじったなら……」

貴夜はわずかに頬を歪め、情けなさそうな顔をして、

「——頭人の好きにしていいいよ。頼りになるのはおまえだけだから」と呟いた。

頭人も瞳の輝きを柔らかくし、「オーケー。了解した」と返した。やけに嬉しそうな表情で頷いた。

次の瞬間、息を潜めていた教室内の生徒達の間、ホツとしたような穏やかな空気が流れ始めた。

誰もが二人の様子を窺っていたのだ。

「本当にあんたらは仲がいいねえ。でも誤解を受けるような言動は、二人だけの時にしたらどうなのさ」

呆れたような声が二人の背後から掛けられた。

声の主は飯塚沙樹。

このクラスでは数少ない貴夜の友人の一人であった。

沙樹は錆色の——染めるんだったらもっと綺麗な、もうすこし地味な色にすればいいのにといつも貴夜は思っている——髪をポニ

―テールにし、背の高いしなやかな感じのする少女だった。わずかに吊り上がり気味の目で、貴夜と顕人を交互に見ている。

「なんだよ、誤解の受けるような言動つてのは？」

沙樹はわざとらしい溜め息を吐き、やれやれと言った表情を浮かべた。

「それって天然？ それともわざとそう見せてんの？ まるであんならだったら、どこぞのバカップルみたいだよ。人前で痴話喧嘩なんてして。怪しい関係に見られても仕方ないんじゃないの？」

「な、なんだよ！ おまえまでぼくらをホモ扱いするのか？」

貴夜の声は裏返っていた。顔が熱くなっているのも自覚している。

「気にするなよ。みんな焼いているのさ。俺達の間係を、な」

顕人はニヤニヤとした笑みを浮かべて、まるで挑発するように沙樹を見つめた。いつの間にか右腕を貴夜の首に回している。

沙樹は一瞬、微妙な表情をしてわずかに顔を赤らめた。

「バカ！ あんたはいいけど、貴夜に迷惑になるだろ！」

「へえ、そうなのか？」

揶揄するような笑みで沙樹に問う顕人。

「ふざけるのもいい加減にして！」

沙樹の目がさらに吊り上がり、剣呑な光を放ち始める。だがその奥には、微かな羞恥の色が顕われていた。

「わかった、わかった。軽い冗談にそんなに本気になるなよ」

顕人はそう言って貴夜の首に回した右腕を降ろす。

「冗談も過ぎると笑えないんだよ！——愛莉もそう思うだろ？」

忌々しげに吐き捨てると、沙樹は同意を求めるように後ろを振り返った。

そこには東條愛莉とうじょうあいりが困ったような顔で微笑んでいた。

愛莉は色白の、おとなしい外観とそれに似合った性格の少女だった。背中まである漆黒の長い髪が美しい、良家のお嬢様と言った風情の愛らしい少女だ。

沙樹とは古くからの友人であるが、外見も性格も、まったく言っているほど正反対の二人であるのに、どうしてそれほど仲が良いのか、二人を知る者はみんな不思議に思っている。

もつともそれは、貴夜と顕人にも当て嵌まるのだが……。

「そうね。でも、桐生君と神代君なら仕方ないのじゃないかしら？」

柔らかい笑みを崩さぬまま、愛莉は控えめにそう答えた。

「仕方ない？」

目を瞬かせ、信じられないと言ったように貴夜は呟く。

「仕方ないってなんだよ……。まさか東條までそんなことを……」

貴夜は疲れたような声でそう言つと、深い溜め息を漏らした。

「ちが、違うわ。わ、わたしは別にそんな意味じゃ——」

愛莉は慌てて小さく手を振って否定した。

「わかってるよ。冗談だよ」

貴夜がそう言つて微笑むと、愛莉はホツとしたように笑みを浮かべた。

「——だって二人とも仲が良すぎるんだもの……」

「そうだよ。ちょっと妖しい雰囲気があるって!」

そう言つて沙樹は大きく頷いた。

「別にいいじゃないか。俺達はガキの頃からの親友なんだ。これくらいはおかしくないだろうさ。それよりもう席に座れ。そろそろセンセイが来るぞ」

顕人はそう言つて自分の席に戻つた。

貴夜も安堵の吐息を漏らし、まだ感じる複数の視線を無視して自分の席に戻つた。

「ちよつと、貴夜」

沙樹が隣の席——もちろん沙樹自身の席だ——から声を掛けてきた。

「うん？　なんだよ？」

「あれだけ神代が怒ったってことは、またあんた、あいつらにやられたの？」

沙樹は身を乗り出すようにして、心配そうな表情で囁いた。なるべく他人には聞かせたくないと言う配慮だろう。

沙樹は実際、貴夜の知る少女の中でも非常に優しい少女だと知っている。派手な外見と乱暴な言動の所為で誤解を受けやすいが、すくなくとも貴夜はそれを知っていた。

中学時代から沙樹には世話になりつつ放しだった貴夜にはわかっているのだ。

「大丈夫だよ。心配しないでよ」

「あんたネエ、大丈夫大丈夫って、いつもそれだけじゃないの。まあ、いざとなれば神代が出張るんだろけど……。でも、あんまり愛莉に心配かけないでよ」

沙樹の言葉に貴夜は思わず笑みを浮かべそうになった。愛莉に転嫁しているが、沙樹自身がそれだけ心配しているのだろう。

もつとも、そんな風に言えば、沙樹は絶対に認めないだろうが。

「ああ、わかったよ。今度から上手くやるさ」

沙樹に向けて真剣な顔で答える。そして小さくありがとつと呟き、貴夜は心からの微笑を浮かべた。

「そ、それならいいのよ」

沙樹は顔を赤らめながら前を向いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2947z/>

『ダーク・ロード ー 黄昏に抗う者』

2011年12月10日17時46分発行